



山本博之、『復興の文化空間学——ビッグデータと人道支援の時代』災害対応の地域研究 1. 京都大学学術出版会, 2014, viii+302p.

自分が調査研究で頻繁に訪れたり、長く滞在したりして、人々や環境のことをよく知っている場所が、突如として災害に見舞われた場合、我々は自分たち自身で何かできることはないか、と問わずにはいられなくなるであろう。よく知る現地の人々のために何かしてあげたいとか、これから支援活動に関わる人たちの助けになりたいとかいうことを考えずにはいられないものである。しかしながら、どこから手を付ければよいのかわからないことがしばしばであるし、結局何もすることができないこともある。さて、本書の著者である山本博之氏は、このように地域を知る地域研究者が災害にどう向き合うか、ということを真摯に考えてきて、『災害対応の地域研究』という概念を打ち出し、これまでの現場での経験や、学術調査・分析そして研究会等を通して得られた知見を、叢書シリーズとして出版した。その第 1 巻にあたるのが、本書である。山本氏は、京都大学地域研究統合情報センターの「災害対応の地域研究」プロジェクトをはじめとして、同分野の研究プロジェクトをいくつも実施しており、論文・書籍等での発表も多く、まさに第一人者といえる。

本書の構成は、「はじめに」に続いて、3 部構成で 9 章があり、そのあとに「おわりに」と「補論」がある。ここでは各章の内容を簡単に説明しつつ、特に興味深い部分について紹介していく。まず、「はじめに」は災害と復興をどう捉えるか、という問いに関して、地域研究の視点を中心に、さまざまな角度から論じながら、本書の意図と章構成が述べられる。それまでの膨大な経験と研究に基づいた著者の結論や、このテーマや被災地への思いが示される。

続いて第一部「情報と地域文化」に入り、第 1 章「災害情報を地図化する——スマトラ島沖地震・津波（二〇〇四年）」は、新聞報道における災

害と復興の情報を分析する手法として、それらを地図に載せることを紹介し、さらに地図上でも災害の違いに応じて 3 つのゾーンに分類して整理することで、新しいことが見えてきたことを紹介している。第 2 章「災害への関心を重ねる——スマトラ島沖地震・津波（二〇〇四年）・ニース地震（二〇〇五年）」では、大災害の報に触れた山本氏らが復興関連情報のホームページを立ち上げて、特に日本人が現地で救援・支援活動をする時に役立ててもらおうとした経験が描かれる。ホームページへのアクセス記録と、現地メディアのニュース等を時系列的に分析しており、そこから復興過程における情報変化を明らかにし、情報提供の在り方について考えさせてくれる。第 3 章「誰が『地元』を語る？——ジャワ地震（二〇〇六年）」では、復興情報・防災情報などを提供するコミュニティペーパーに着目し、やはりそこに掲載される情報の分析をしているが、「立場に関わらず誰もが認める中立的な『正しさ』は存在しない」（p.104）ことを指摘し、そのことを理解しておく必要を述べている。第 4 章「『正しさ』が招く混乱——西ジャワ地震（二〇〇九年）」では巨大都市ジャカルタが地震を経験したときに市民がどう反応したかを、地方での場合と比べながらメディアでの情報を分析し、災害対応は全国一律ではなく、地域社会ごとや現場ごとでなされる必要性を述べている。これらの第一部 4 章に共通して、実に興味深いのは、情報を分類するというのである。かつては情報不足が問題になりがちであったが、近年ではむしろ情報があふれており、逆にそこから必要な情報を抜き出すことが難しくなっている。本書では、防災・復興に役立つよう、情報をいかに分類するか試行錯誤した経緯を示しつつも、情報を地理的に分ける、時系列で分ける、キーワードで分ける、テーマで分ける、というそれぞれで見えてくるものが違うことを明確に示しており、これは他の地域や研究にも応用できる。

第二部「支援と格差、そして物語」の第 5 章「米を捨てる人——ベンクル地震（二〇〇七年）」では、メディアで報じられた被災地の問題の背景に、社会構造や歴史的経緯など地域の人にしかわからない問題が潜んでいたことを例にしつつ、地

域の人だからこそ解決できない軋轢を、外部の人が調整できる可能性を指摘している。第6章「尾根筋に住む——西スマトラ地震（二〇〇九年）」では、防災専門家の意見や支援団体の活動を見る中から、地域の特性を浮き彫りにしており、そのような「流動性が高い」社会に対応するよう、支援する側が柔軟な工夫を施す必要を述べている。第7章「浪費と駆け引き——スマトラ島沖地震・津波（二〇〇四年）」では、住民が外部からの支援をどう受け止めてきたかに着目し、災害直後とその3年後の違いや、国際支援団体と住民との軋轢を描いた映画などを例に出しながら、「住民参加型から住民納得型の支援へ」（p.197）と説く。これら第二部の3章を通して、著者は住民と援助団体、現場と本部などの橋渡しや調整をする役割の必要性に繰り返し言及しており、また「人道支援業界の外部の専門性」（p.196）の活用にも触れ、そこにこそ地域研究者の役割があると示唆している。

第三部「流動性と想像力」の第8章「人道支援とビッグデータ——物語や意味を掘り取る」では人道支援の在り方として、被災者が自分たちにあった支援者を選ぶ・活用するという視点について述べられている。またビッグデータ活用の可能性に触れたあと、「アチェ津波モバイル博物館」「アチェ津波アーカイブ」等の試みを紹介し、地域情報の「バックアップ」（p.228）、すなわち物理的なハードディスクの内容だけではなく、人々や地域の「物語」のバックアップをとる、という意義を述べている。第9章「そして日本——東日本大震災（二〇一一年）」では、日本人が日本の災害現場で支援に関わることで、言葉や文化を共有する者同士だからこそ分かり合えることや、逆にそこから起こる問題があることを論じ、そして日本でも地域ごと・人ごとの様々な物語があり、それはどれか一つが正しいというものではないことが述べられる。

「おわりに」では、これまでの章の要点を振り返りつつ、「地域研究的想像力」（pp.261-263）という言葉を使い、どこかの地域を深く知った経験があれば、それを応用して他の地域を訪れても自分と相手には異なる文脈・物語があることを想像できるようにすると説く。被災者も支援者もすべて

の人がこの想像力を持つことで、復興とともに歩む新しい物語を生み出していくことができるといふ理想が示される。その後にさらに、「補論 災害・復興研究の系譜——地域研究の視点から」があり、これまでの指摘を基に災害対応の地域研究の有意義さを論じている。

このように各章はとても興味深いものとなっているが、あえて短所として指摘したいのは、本書の副題と内容のギャップである。ビッグデータというのは、少し前までは扱うことができなかったほど膨大なデータのことであるが、技術の発達によりその収集・保存・解析が可能になってきている。SNSでの無数のつぶやき、カーナビのデータ、衛星観測のデータ、統計資料など様々な分野のデータを統合的に扱うもので、それは数百ギガバイトやペタバイトに達することもある。そのような膨大なデータから、意味をくみ取るには、解析技術としてのインフォマティクスが必要であり、その技術的發展もビッグデータの用語に含まれる。そういう観点からすると、本書で扱われているのは、ビッグデータを構成しているごくごく一部を、個別に取り扱ったに過ぎない。分析も特に新しいものではなく、個人の人力処理能力の域を出ないという感想である。本文中でビッグデータに触れられるのは、第8章のみで、その扱いも小さい。したがって、副題を見た時には、「ビッグデータの地域研究」という新しい地平線が開拓されたことを期待して読み始めたものの、第一部の情報分類が有益であった他は、全体としては期待外れであった。したがって地域研究よりもビッグデータに関心の重さがある人には向かない。

また地域研究については、大いに考えさせられる点もある。冒頭に書いたように地域研究者は、調査地が災害に遭ったときには、自身の在り方に悩みを持つのだが、本書とは全く違う結論を出した例として、菅豊氏の『「新しい野の学問」の時代へ——知識生産と社会实践をつなぐために』[2013]がある。そこではまず東日本大震災の実例として、研究者が被災地を訪れ、研究と称して被災者を振り回し、負担をかけてきたことが引用される。研究者として住民を見る目線だけでなく、住民として研究者を見る目線もあるのである。菅

氏は、悩みつつも、伝統闘牛の勢子となって、新潟県中越地震を経験した小千谷市のフィールドに戻ることで、住民と同じ目線で世界を見ることにした。このような被災者からの目線というのは、本書で山本氏もたびたび触れており、全体を通してそこに寄り添う立場を示しているが、第8章のpp. 208-210では「役割交代——受援力を超えて」として、被災者のほうも役割を変える必要があること、つまり被災者自身も変わるべきことを指摘しており、研究者として住民を見た目線に他ならない。被災者を思い、胸が張り裂けるような思いをするのは皆同じとして、そのとき地域研究に実践的な意味を持たせて、それを行動に移せるというのは、誰にでもできるとは限らないし、それが唯一の答えとは限らないのではないか。しかし、それでは、自分は何ができるだろうか。地域研究者として災害への在り方について、良い意味で考えさせられることとなった。

「災害対応の地域研究」叢書シリーズは全5巻であり、2016年3月に刊行が完了しており、シリーズ全体でも様々な視点について学び、様々な立場から考えられるようになっている。図表が多く用いられ、現地の写真もたくさんあり、理解しやすいように工夫されている。装丁にも工夫があり、全ページに、欄外に小さな写真があるのも好感がもてるほか、全5巻をそろえるとSTORYの重要さ、つまり本書でも繰り返し示された物語の重要さというメッセージが現れるようになっている。災害と復興について理解を深めるため、被災地について学ぶため、地域研究者として災害・復興に役立とうとするため、あるいは地域研究のあり方やその未来について考えるため、本書およびこのシリーズはとても有益なものである。このような関心をもつ方々に、広く読まれることが望まれる。

(古澤拓郎・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

参考文献

菅 豊. 2013. 『「新しい野の学問」の時代へ——知識生産と社会実践をつなぐために』東京：岩波書店.

西 芳実. 『災害復興で内戦を乗り越える——スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』災害対応の地域研究 2. 京都大学学術出版会, 2014, x+328p.

大きな自然災害は、人々の日常生活を中断させ、生存者に当該社会のあり方を再考させる。復興活動はそのため社会秩序の再建を伴う。近年の自然災害は、メディアで広くニュースが伝わり、外部世界から支援団体が多数参入し、復興活動を進展させる。2004年12月26日のスマトラ島沖地震・津波は、それを如実に語る。本書は、地震前からアチェが抱えていた社会的課題に着目しつつ、地震とその後の復興に向けての9年間の人々の歩みを綴る。

天然ガスなど豊かな資源を有するアチェでは、利益配分をめぐるインドネシア中央政府と確執が生じ、1976年より独立を唱える自由アチェ運動が展開していた。とりわけスハルト体制が崩壊した1998年以降、自由アチェ運動は活性化した。インドネシア政府は2003年アチェに非常事態を宣言し、独立派ゲリラ掃討のための軍事作戦を展開した。外部からの報道者や人道関係の支援者のアチェ入域は、厳しく制限された。こうした状況下、スマトラ島沖地震・津波がアチェを襲った。津波は、海岸部付近のコミュニティを破壊し、17万3千人の人々の命を奪った。生き残った人々は、自らの生存の意義をかみしめつつ、災害復興に取り組むこととなった。

本書は3部(9章)から構成される。第一部「紛争下の被災——津波が解く『困り込み』」では、①アチェでは1907年に地震・津波に襲われながら、アチェの沿岸部の人々は津波の危険性について知らなかったのか、②2004年の地震・津波後の国際的な支援活動に対し、インドネシア国軍はなぜ、外国による支援活動を妨害しようとしたのか、③日本もそうした支援活動の一翼を担ったが、日本のNGOの緊急・復興支援はアチェにとって本当に意味があったのか、の3つの議論が展開される。

アチェは過去に津波を伴う地震を経験していたにもかかわらず、その経験は現在の人々に伝えら